



SHD インターベンション コンプリートガイド

ストラクチャークラブ・ジャパン 監修

有田武史, 原 英彦, 林田健太郎,
赤木禎治, 白井伸一, 細川 忍,
森野禎浩 編

●B5 頁 456 2019年5月

定価：本体 13,500 円+税

[ISBN978-4-260-03667-2]医学書院刊

構造的な心疾患 (structural heart disease : SHD) に対するカテーテル治療の必要性は、飛躍的に広まっています。

カテーテル治療は 1970 年代に冠動脈形成術が開始され、現在の第 2 世代薬剤溶出性ステントを用いた冠動脈インターベンション (PCI) において、冠動脈バイパス術と並ぶ標準的な治療法となりました。冠動脈領域のみならず、末梢血管領域、SHD 領域にも、手術と並ぶカテーテル治療が出現し、一部にとって代わる時代になりつつあるのは、低侵襲を望む患者さんの希望の現れでもあります。現在では、冠動脈領域、末梢血管領域、SHD 領域はカテーテル治療の 3 本柱となり、広く行われる体制と変わってきています。

そのなかにおいても、SHD 領域は、井上寛治先生による Inoue バルーンが僧帽弁狭窄症に有効であることが示され、世界中に広く施行されることになったことから始まり、大動脈弁狭窄に対する TAVI により日本では決定的に広まることとなりました。TAVI を契機とし、ハートチームの各施設での見直し、ハイブリッド手術室の整備など劇的に変貌を遂げた領域であると思われます。そして、僧帽弁のクリップ、また先天性

心疾患の短絡閉鎖、左心耳閉鎖など、今も適応領域が広がっています。この進展スピードは目を見張るものがあります。

新しい技術の発展を安全に広く臨床サービスとして日本全国に届けるには、日本語のテキストが重要です。今回、ここに『SHD インターベンションコンプリートガイド』が発行されることになりました。最初の試みは 2013 年であり 6 年が経過しましたが、この間に新たに適応となった手技、新たなエビデンス、数え切れないほどの新しい情報がある時代です。これを的確にコンパクトにまとめあげ、SHD インターベンションの術者には有益な情報がある優れた日本語のテキストであると思われます。これを基に、新しい技術である SHD インターベンションが安全に日本で広まっていくことは日本心血管インターベンション治療学会 (CVIT) としても望ましい方向性であります。

インターベンション治療は外科手術と比べて低侵襲であることが優れています。長期成績を含めてまだまだ明らかにしていかなければいけない点も多数ありますが、本テキストによる手技の標準化が安定した成績につながることを期待します。